

1 DOKK1 - オーフス市中央図書館

2018年12月3日、オーフス市中央図書館 DOKK1 に訪問し調査を実施した。DOKK1 はコペンハーゲンに次ぐデンマーク第二の都市であるオーフス市の公共図書館である。2014年に開館した。本調査では、館長である Marie Østergård 氏へのインタビュー調査を行った。以下は、館長のインタビューの書き起こしが基礎となっているが、一部を引用文献で補足した。

1.1 理念と組織体系

オーフス市(デンマーク)に新しい図書館を建設する際に、「市の中心になる」を図書館の理念とした。DOKK1 の建設予定地は人気のない海沿いであり、新しい中央館をこの地域に設置することで市の中心部の人の流れを変えようとするものである。これは都市再開発計画の位置づけとも重なる。

ビジョンとしては、第一に市民・パートナーとの協働がある。DOKK1 の建設計画時からデザイン思考(Design Thinking)とトランスフォーメーション・ラボ(Transformation Lab)により「いかに市民やパートナーと協働するか」の問いを常に意識して行なっている¹⁾。

第二には、自治体業務においても自治体の一部になるということである。これを実現するために、運転免許やパスポートの発行といった市民のあらゆる自治体の手続きを DOKK1 で受けられるようにした。

第三には、あらゆる人々のための非商業的な空間となることである。図書館は社会においてジェンダー、年齢、政治的信条、宗教などを超えて人々が集まることにできる唯一の非商業的な空間である。そのほかに、

インフォーマル・ラーニングや子どもと家族のための場所といったビジョンも設定されている²⁾。

これらの理念とビジョンを実現するために数多くのコンピテンシーが必要となり、図書館員もジェネラリスト志向となった。

1.2 ブランド体系

オーフス市の図書館は中央館である DOKK1 と 18 の地域館から構成される³⁾。DOKK1 のような図書館はデンマークにおいて現段階では唯一無二であり、特別なブランド設定は行っていない。

1.3 表象とコミュニケーション

“DOKK1”とは、オーフス市の港(立地)を意味している。また、“NextLibrary”も次世代の図書館とは何かを模索するために国際会議の名称として数年前から用いている。世界中(38カ国)の人々が集まる。

オーフス市図書館としては、特定のスローガンは用いていない。IFLA の“Libraries change lives”を用いるときはあった。



図 1. DOKK1 のロゴ

1.4 顧客

オーフス市のあらゆる市民と観光客を対象としている。その際、協働を通してこれまで図書館を利用していなかった人々も DOKK1 に訪れてもらう努力をした。結果、かつては 1 日に約 1,800 人の訪問者だったのが、31 万の人口にもかかわらず今では 1

日の訪問者が約3,700人に達している。

利用者は図書館とDOKK1を同等にみなしておらず、DOKK1は「文化的なミーティングプレイス」と感じている。

1.5 アクティビティ

図書館建設計画から市民との協働を15年以上にわたって培ってきた歴史がある。これは、図書館のイベントを検討する際にも生きており、ステークホルダーとの協働のもと、週に50ものあらゆる世代に向けた多様なイベントが開催されている。

1.6 空間環境デザイン

1階は、エスカレーター、路面電車の停留所、地下へとつながる駐車場がある。2階は、中央入口、オーフス市中央図書館、自治体サービス窓口、カフェ、テレビ局の収録スタジオが設置されている。3階には、乳幼児から大人までの幅広い図書館サービスが用意されている。4階は、職員向けのスペースとなっている。また、2階から4階にかけては、開かれた講堂が設置されている。その他に、最上階には貸しオフィスがある。

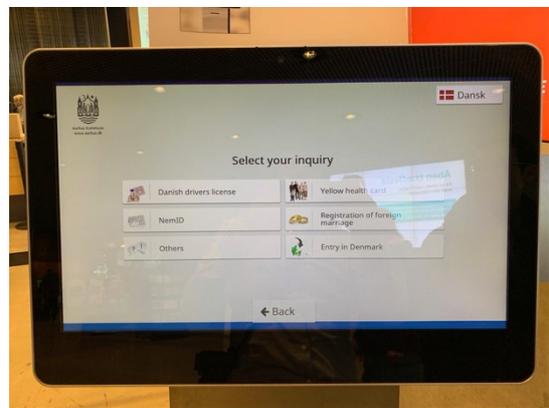
1.7 職員エンゲージメント

館長は、図書館員に対して「(図書館の空間は) 図書館員に所有された空間から市民のための空間」という空間のオーナーシップの返還を要求していた。その実現のために、図書館員は市民との協働を重視するようになっていった。例えば、先に挙げたトランスフォーメーション・ラボでは、新サービスの開発を推奨し、それによる誤りも許されるような環境を作り上げている⁴⁾。

1.8 写真による訪問記録



DOKK1の外観



自治体のサービス端末



講堂（2階から4階）



中央入口付近の書架エリア（2階）



The Gong（鐘）

* 付近の病院の産婦人科に繋がっている

2 ダイクマン図書館 – オスロ市公共図書館

2018年12月9日から12日まで、オスロ市公共図書館のダイクマン図書館に訪問し調査を実施した。

ダイクマン図書館はノルウェーの首都オ

スロ市の公共図書館である。2020年6月に新中央館が開館しているが、訪問したのは開館前であり、旧中央館と分館3館を訪問した。この中でダイクマン・ビブロ・トイエンは特徴的であり、10-15歳の子供しか入館できない、子供専用の図書館である。

ダイクマン図書館の館長である Knut Skanssen 氏、コミュニケーションディレクターの Jørn Johansen 氏、ビブロ・トイエン分館長の Reinert A. Mithassel 氏の3名へのインタビュー調査を行った。以下、それぞれを館長、CD、分館長と記し、インタビューにおける発言を区別する。

2.1 理念と組織体系

館長によれば、ダイクマン図書館のビジョンは「誰もが自身の生活に対する所有権や市とコミュニティへの関与を感じ、所属していることを感じられる社会」を支えることである。そしてミッションは、ビジョンの達成のための方法であり、「近代的な図書館サービス、イベント、コレクション、スペースの利用により、オスロ市の市民をむすびつける」ことである。そのための図書館の核は、「コレクション」と「スペースと情報の提供」である。

CDは、ダイクマン図書館は「市民の最高の部分を引き出すための場所であり、長所を引き出す手助けをする場所」と述べている。

2.2 ブランド体系

インタビュー時より3~4年前に、コミュニケーションの部門を新たに設置した。それは、図書館の変化を伝え、理解してもらい、図書館利用のモチベーションにつなげ

るために重要であるためである（館長）。

2.3 表象とコミュニケーション

コミュニケーション部門設置後、まず、図書館の名称を”Deichman”に統一した。それまでは、Deikmanske や Deichmanske Bibliotek などの表記が混在していた。表記の統一により、市内のすべての図書館を同じ図書館であると市民が理解しやすくなるようにしている（CD）。

また、図書館のロゴを図 1 に示す。このロゴの DE の部分は「光」を表している。また、光を表している部分のみで用いられることもある。図書館が行っていることは、啓蒙 (enlightenment) であり、それを表すために光としている（CD）。



図 2. ダイクマン図書館のロゴ

2.4 顧客

フルセット (Furuset) 分館では、ボランティアセンターと呼ばれる仕組みを作っている。これは、ボランティアが登録して「他の人を助けたい」ということを図書館でできる仕組みである。実際に、例えば、児童の宿題の支援や、高齢者の ICT 支援が行われている（館長）。ただし、調査時には、今後、その形態を維持するか変更するかを検討しているとのことであったため、記事の公開時点では形態が変更となっている可能性もある。

2.5 アクティビティ

新中央館は、本を借りて返すという従来の図書館ではなく、自分自身を表現する経験をし、他の人と共有するということができるように設計している。そのためにスタッフも、従来の司書ではなく、ファシリテーターやホストのような役割を果たす（館長）。

ダイクマン・ビブロ・トイエンでは、図書館内に張り巡らされたルールに沿って、書架やゴンドラを容易に移動できるため、子供たちによって常にレイアウトが変わっている。訪問時には、子供たちのためのレストランの準備が行われていた。このイベントでは、子供たちが料理をしたり、ウェイターとなったり、客として食事をしたりできる（分館長）。

2.6 空間環境デザイン

旧中央館は 70% が事務スペースで 30% が利用者向けスペースであったが、新中央館では、利用者スペースを拡大し、30% の事務スペースと 70% の利用者スペースとなる。また階層も、ヘルシンキ・セントラル・ライブラリー・オーディ (Oodi) は図書館の各機能がレイヤーのように分けられているのに対し、新中央館はすべての機能がミックスされる。このことにより、市民が「図書館」と「何か別の施設」が合わさってオープンしたと誤解することを防ぐ（館長）。

ダイクマン・ビブロ・トイエン (Tøyen) では、環境心理学 (Architectural psychology) を学んだ建築家のアイデアも踏まえて設計を行った。例えば、「子供たちは狭い場所にくるまれるのが好き」「狭い場所に、複数人で集まるのが好き」といった心理から狭い場所を用意しているといった点が工夫され

た点である。実際に、狭い空間で身を寄せている姿がよく見られる（分館長）。

2.7 従業員エンゲージメント

地元オスロ市の ANTI というコンサルティング会社に依頼し、当時の全職員に図書館についてのアイデア、何が最も重要かを尋ね、その回答を整理して図書館のストーリーを作成し、ビジョンとミッションに反映した（館長）。



籠の形の空間（ダイクマン・ストブナー）

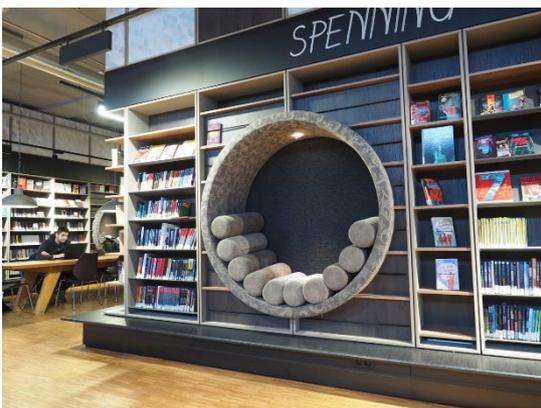
2.8 写真による記録



旧中央館の外観



料理ができる設備
（ダイクマン・ビブロ・トイエン）



円形のソファ（フルセット分館）



動かせるゴンドラ
（ダイクマン・ビibro・トイエン）



狭い空間（ダイクマン・ビブロ・トイエン）

注・引用文献

- 1) Aarhus Bibliotekerne. About Aarhus Public Libraries. [https://www.aakb.dk/about-aarhus-public-libraries#:~:text=Aarhus%20Public%20Libraries%20consists%20of,access%20to%20all%20our%20services.\(accessed: 2018-11-25\)](https://www.aakb.dk/about-aarhus-public-libraries#:~:text=Aarhus%20Public%20Libraries%20consists%20of,access%20to%20all%20our%20services.(accessed:2018-11-25))
- 2) Marie Ostergard. ALA. http://www.ala.org/pla/sites/ala.org.pla/files/content/onlinelearning/webinars/archive/Marie_Oestergaard_PLAWebinar_nov_16.pdf. (accessed: 2018-11-25)
- 3) Marie Ostergard. Dokk1: a performative library space?. ALIA National 2014 Conference: Together we are stronger. <https://read.alia.org.au/content/dokk1-performative-library-space>. (Accessed: 2018-11-25)
- 4) Sidsel Bech-Petersen, Lisbeth Mærkedahl, Marianne Krogbæk. Dokk1: co-creation and design thinking in libraries. PDC '16: Proceedings of the 14th Participatory Design Conference: Short Papers, Interactive Exhibitions, Workshops, vol. 2, p.92-93., <https://doi.org/10.1145/2948076.2948109> (accessed: 2018-11-25)

（著者：小泉公乃，五十嵐智哉）